

黒子に徹した潔いブックデザイン アートディレクター・有山達也

マガジンハウスのライフスタイル誌「ku:nel」のエディトリアルデザインや「一瞬の風になれ」といったベストセラー小説など、数多くのブックデザインを手掛ける有山達也さん。有山さんの仕事には「文字」の力だけで構成したデザインが少なくない。その「文字」には、奇をてらったものではなく、静かな存在感が漂っている。



『ケモノと魔法』(1) 表紙デザイン

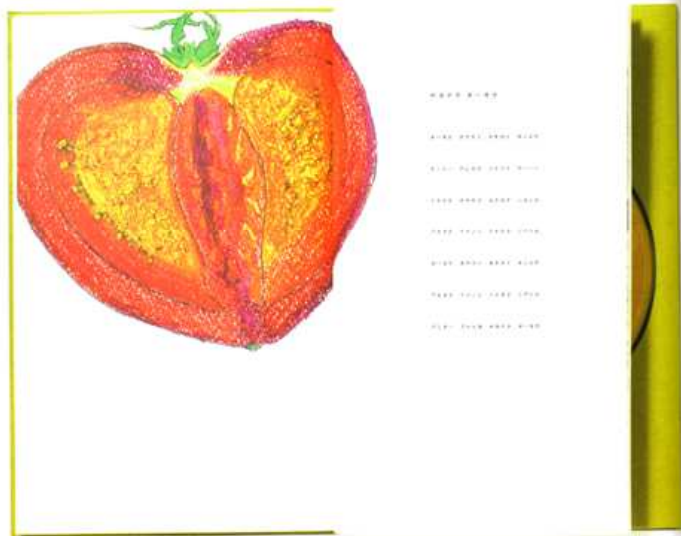


『気配と余韻』(1) 表紙デザイン

ブックCDでアーティストの世界観を表現

有山達也さんのデザインには、主張をしすぎない、黒子に徹した潔さがある。

アーティスト原田郁子さんのミニアルバム「気配と余韻」と「ケモノと魔法」の初回限定盤(コロムビアミュージックレコード)は、本と組み合わせたCDアルバム。有山さんは、このブックCDをアートディレクションする前に、「原田郁子」というアーティスト像を知るためフェイスブックフェイスで打ち合わせを重ね、イメージを膨らませていった。「原田さんは「かわいい」というパブリックイメージが先行しているようですが、実はもっと混沌とした、内面的



『ケモノと魔法』(2) 表紙・裏表紙デザインとCDジャケットデザイン

なところに魅力があると思うんです。そういう混沌とした世界観をビジュアルで表現したかった」。

「気配と余韻」では原田さんのメモやイラストをコラージュしたビジュアルブック、「ケモノと魔法」では原田さんが描いた絵と物語を紡いだ絵本となっている。散えてまとまっていない感じで仕上げたという2つのブックCDは、原田さんの頭の中を具現化したかのよう。予定調和の、コンセプトualなものにはしたくない、というのが二人の共通認識だった。「本をきっちり構成してしまうと、ある一つの方向性が生まれる。そういう方向付けはこのブックCDには不相応。まとまっていない方が原田さんらしいかなと思いました」。

こうした世界観を決めてから、書体を選んでいくのが有山流。「気配と余韻」の表紙の文字や配列には、まさしく余韻が残るような空白を重視。「ケモノと魔法」の表紙は、物語の雰囲気や全体の印象から書体を選び、カタカナの「ノ」、「魔」の「ほね」などベースの書体に手を加えアクセントをつけた。このように、既成の書体をいじって再構築することも多いという。本文の

文字は、漢字に「こぶりな」、仮名に「くれたけ」を組み合わせ、位置や大きさは感覚で決めた。どちらも表紙に安価な仮紙を使い、シリーズとしてのつながりを表現している。

イメージを重ねるか、ミスマッチを狙うか

永作博美さんの初エッセイ「やうやう」(トルモア)の本文の書体では、漢字に「リュウミン」、仮名に「たおやめ」を使用した。この2つの組み合わせを有山さんはよく使う。「クラシックなだけじゃなく、さびさび感、おちこいけどねちっこさがない、この書体の組み合わせにはどこか「中間的な」イメージがある。一見、少年のようなカラッとした性格に見えるけど、内側はもっと湿度が高い人を感じたので、この書体が合うかな、と」。

一方、日本の書体ではなく、海外の書体を使った例が、7月5日からPARCO劇場でも上演される長塚圭史さん書下ろしの舞台「Sisters」のポスターやパンフレット。この欧文の書体は、以前ベルリンを訪れた時に古本屋で手に入れたチェコのレタリング帳(1961年発行)から拾っている。「どこか「イケてない



『やうやう』(1) 表紙デザイン



『Sisters』(1) 表紙デザイン



『Sisters』(2) 表紙デザイン

海外の書体を探していました。劇の内装はまだ完全に決まっていなかったのですが、どちらにせよこの書体とビジュアルがミスマッチで面白くないんじゃないかと考えました。和文はタイプバンクの「新聞書体」を使用、4色で印刷されているが散らばってマット感を使っているので、文字の質感がテカらず、独特の存在感を生み出すことに成功している。

「伝える」ことから離れてはいけない

これらの仕事から、有山さんがデザインにおける文字の役割をとっても大切にしていることがわかる。「書体がどうか、組版がどうかというのは確かに大事だけれども、文字オタクになって、もっとも重要な「伝える」ことが疎



『やうやう』(2) 表紙デザイン

かになってはいけません。有山さんが文字に取り組み始めたのは、美術大学卒業後、中垣デザイン事務所に3年間籍を置いていた頃。そこでは、「この和文の書体にはこの欧文の書体」という、決められた組み合わせが何通りもあり、限られた書体の中から仕事に応じて組み合わせを選んでいくシステムを採用していた。そこで経験を積み、好きなデザイナーが使っている書体を独学で調べるうちに、書体を見抜く力を養っていった。「文字の習得は1年や2年でどうにかなるものじゃない。僕自身、まだまだわかっていないなど日々感じています」。目に触れる文字、街にあふれる文字に対して常に意識することが重要だという。



有山達也 ARIYAMA TATSUYA
アートディレクター
1978年東京都生まれ。2001年東京芸術大学美術学部デザイン学科卒業。その後、中垣デザイン事務所にて勤務。2003年独立して中垣デザイン事務所を設立。2011年「ケモノと魔法」のブックCDをアートディレクション。2012年「気配と余韻」のブックCDをアートディレクション。2013年「やうやう」のブックCDをアートディレクション。2014年「Sisters」のポスターやパンフレットをデザイン。2015年「PSYCHO」のブックCDをアートディレクション。